

令和8年度病害虫発生予報第1号（5月予報）概要表

令和8年4月28日
埼玉県病害虫防除所

作物名・病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
<u>1 水稻（5月中旬までの移植）の移植期防除対策</u>		
（1）いもち病（葉いもち）		
（2）縞葉枯病		
（3）イネミズゾウムシ		
（4）スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）		
<u>2 水稻（5月下旬以降の移植）の移植期防除対策</u>		
（1）いもち病（育苗期）		
（2）もみ枯細菌病		
（3）スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）		
<u>3 麦</u>		
（1）さび病類（コムギ赤さび病、オオムギ小さび病）		やや少
（2）うどんこ病		並
（3）赤かび病 オオムギ		多
コムギ		多
（4）アブラムシ類		並
<u>4 なし</u>		
（1）黒星病		並
（2）ハダニ類		並
（3）アブラムシ類		並
（4）果樹カメムシ類		やや多
（5）シンクイムシ類（ナシヒメシンクイ）	並	多
<u>5 トマト（冬春栽培）</u>		
（1）灰色かび病		並
（2）葉かび病		並
（3）コナジラミ類		並

表の見方について

- ・ 予報の発生量は、予報月の平年値（埼玉県の過去10年間の平均）との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ※ 過去10年間で予報月に発生が確認されていない病害虫については、「発生が見られない」と予想した場合、予報の発生量を「並※」と示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、予報月の平年値（埼玉県の過去10年間の平均）との比較で、「早、やや早、並、やや遅、遅」の5段階で示しています。

作物名・病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
6 なす（夏秋栽培）の防除対策		
（１）アザミウマ類		
（２）アブラムシ類		
7 きゅうり（冬春栽培）		
（１）べと病		並
（２）うどんこ病		並
（３）褐斑病		やや少
（４）アザミウマ類		並
（５）コナジラミ類		やや多
8 ねぎ（秋冬栽培）の防除対策		
（１）ネギアザミウマ		
9 茶		
（１）チャハマキ（第 1 世代幼虫）	やや早	やや多
（２）チャノコカクモンハマキ（第 1 世代幼虫）	早	やや多
（３）チャノホソガ（第 1 世代幼虫）	並	やや少
（４）カンザワハダニ		並
（５）クワシロカイガラムシ（第 1 世代幼虫）	並	

表の見方について

- ・ 予報の発生量は、予報月の平年値（埼玉県の前 10 年間の平均）との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
- ・ 並※： 予報月における発生が過去 10 年間で確認されていない病害虫について、「発生が見られない」と予想した場合、予報の発生量を「並※」と示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、予報月の平年値（埼玉県の前 10 年間の平均）との比較で、「早、やや早、並、やや遅、遅」の 5 段階で示しています。

令和 8 年度病虫害発生予報第 1 号（5 月予報）

令和 8 年 4 月 28 日
埼玉県病虫害防除所

1 水稲（5 月中旬までの移植）の移植期防除対策

病虫害名	防除上注意すべき事項
いもち病 (葉いもち)	・本田の置き苗は感染源となるため、早めに撤去する。 ・移植後に発生が見られた場合は、「病虫害診断のポイントと防除対策」(参照 1)を参考に、本田防除を実施する。
縞葉枯病	・コシヒカリ、キヌヒカリ等の本病感受性品種で箱施薬を実施しなかった場合は、「病虫害診断のポイントと防除対策」(参照 1)を参考に、本病ウイルス媒介虫であるヒメトビウンカの本田防除を実施する。
イネミズゾウムシ	・箱施薬を実施しなかったほ場で、移植直後から本虫の侵入が見られた場合は、速やかに本田防除を実施する。
スクミリンゴガイ (ジャンボタニシ)	・移植前の入水時から移植後 3 週間まで、取水口・排水口に 9 mm 目合のネットや金網を設置する。 ・常発地域では、移植時に薬剤の全面散布を行う。特に貝が集まりやすい深水部には重点的に散布する。 ・常発地域では、移植後 3 週間を目安として浅水管理(水深 4cm 以下)を行う。
【共通注意事項】 (スクミリンゴガイを除く) ・常発地や昨年多発した地域で、播種時箱施薬を実施していない場合は、移植前の箱施薬剤で防除する(縞葉枯病はヒメトビウンカ対象)。	

参照 1：病虫害診断のポイントと防除対策 <https://www.pref.saitama.lg.jp/b0916/point-h27kai.html>

表の見方について

- ・ 予報の発生量は、予報月の平年値（埼玉県の過去 10 年間の平均）との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
- ・ **並***： 予報月における発生が過去 10 年間で確認されていない病虫害について、「発生が見られない」と予想した場合、予報の発生量を「並*」と示しています。
- ・ **多****： 調査月における発生が過去 10 年間で確認されていない病虫害について、今回の調査時に発生があった場合、「多**」と示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病虫害に限り、予報月の平年値（埼玉県の過去 10 年間の平均）との比較で、「早、やや早、並、やや遅、遅」の 5 段階で示しています。
- ・ 予報の根拠の○は現在の発生状況、■は今後の発生時期、□は今後の発生量に影響する要因を示し、(+)は助長または促進、(-)は抑制、(±)は傾向維持を意味します。

2 水稻（5 月下旬以降の移植）の育苗期防除対策

病害虫名	防除上注意すべき事項
いもち病 （育苗期）	・「病害虫診断のポイントと防除対策」（参照 1）を参考に、種子予措を実施する。 ・育苗箱に発生した場合、薬剤による防除を実施し、寒冷紗被覆をはがすなどして通風の改善を行う。
もみ枯細菌病 （育苗期）	・「病害虫診断のポイントと防除対策」（参照 1）を参考に、育苗管理を実施する。 ・温湯消毒を行う場合、60℃10 分間処理では本病に対する効果が不十分なことがある。そのため、薬剤による消毒を行うか、事前に十分な発芽率を確認した上で、60℃15 分間処理を行う。 ・病原細菌は高温で増殖するため、催芽時及び播種後の温度が 28℃以上にならないよう管理する。
スクミ リンゴガイ （ジャンボ タニシ）	・移植前の入水時から移植後 3 週間まで、取水口・排水口に 9 mm 目合のネットや金網を設置する。 ・常発地域では、移植時に薬剤の全面散布を行う。特に貝が集まりやすい深水部には重点的に散布する。 ・常発地域では、移植後 3 週間を目安として浅水管理(水深 4cm 以下)を行う。
【共通注意事項】 （スクミリンゴガイを除く） ・常発地や昨年多発した地域では、播種期～育苗期に箱施薬剤で防除を徹底する。	

参照 1：病害虫診断のポイントと防除対策 <https://www.pref.saitama.lg.jp/b0916/point-h27kai.html>

表の見方について

- ・ 予報の発生量は、予報月の平年値（埼玉県の過去 10 年間の平均）との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
- ・ **並***： 予報月における発生が過去 10 年間で確認されていない病害虫について、「発生が見られない」と予想した場合、予報の発生量を「並*」と示しています。
- ・ **多****： 調査月における発生が過去 10 年間で確認されていない病害虫について、今回の調査時に発生があった場合、「多**」と示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、予報月の平年値（埼玉県の過去 10 年間の平均）との比較で、「早、やや早、並、やや遅、遅」の 5 段階で示しています。
- ・ 予報の根拠の○は現在の発生状況、■は今後の発生時期、□は今後の発生量に影響する要因を示し、(+) は助長または促進、(-) は抑制、(±) は傾向維持を意味します。

3 麦

病害虫名	発生 予想 (発生量)	予報の根拠	防除上注意すべき事項
さび病 〔コムギ〕 赤さび病 オオムギ 小さび病	やや少	○4 月中旬の発生量：無 □県予察ほ場の発生量：無（－） □前年の発生量：やや少（－） □気象予報：気温は高い、降水量はほぼ平年並、日照時間は平年並か少ない（±）	・窒素質肥料の過多などにより、過繁茂となっているほ場では発生しやすいため、ほ場をよく観察し、初期防除に努める。
うどんこ病	並	○4 月中旬の発生量：並 □県予察ほ場の発生量：並（±） □気象予報：気温は高い、降水量はほぼ平年並（±）	・ほ場観察に努め、止葉を含む上位 2 葉に病斑が進展する恐れがある場合は、薬剤による防除を実施する。
赤かび病	オオムギ多 コムギ多	○4 月中旬の発生量：－ □4 月 27 日現在の子のう胞子飛散好適日出現日数（3 月 1 日からの積算）：14 日（平年 9.7 日）（＋） □気象予報：気温は高い、降水量はほぼ平年並（＋）	・4 月 27 日発表の「注意報第 1 号」（ 参照 3 ）を参考に薬剤による防除を実施する。 ・「病害虫診断のポイントと防除対策」（ 参照 1 ）を参考に防除対策を実施する。 ・4 月 14 日～16 日および 23 日～25 日に子のう胞子の飛散好適日が連続して出現しているため、この時期に開花期となったほ場では発病に注意する。 ・開花期防除後に降雨が継続した場合、開花 10 日後に 2 回目防除を実施する。
アブラムシ類	並	○4 月中旬の発生量：やや少 □県予察ほ場の発生量：並（±） □気象予報：気温は高い、降水量はほぼ平年並（＋）	・多発ほ場では稔実不良による減収や品質低下が発生するため、乳熟期までに薬剤防除を実施する。

参照 1：病害虫診断のポイントと防除対策 <https://www.pref.saitama.lg.jp/b0916/point-h27kai.html>

参照 3：令和 8 年度病害虫発生予察注意報第 1 号「ムギ類赤かび病」
<https://www.pref.saitama.lg.jp/b0916/bojo/chuiho-r8-1.html>

表の見方について

- ・予報の発生量は、予報月の平年値（埼玉県の過去 10 年間の平均）との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
- ・並※：予報月における発生が過去 10 年間で確認されていない病害虫について、「発生が見られない」と予想した場合、予報の発生量を「並※」と示しています。
- ・多※※：調査月における発生が過去 10 年間で確認されていない病害虫について、今回の調査時に発生があった場合、「多※※」と示しています。
- ・予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、予報月の平年値（埼玉県の過去 10 年間の平均）との比較で、「早、やや早、並、やや遅、遅」の 5 段階で示しています。
- ・予報の根拠の○は現在の発生状況、■は今後の発生時期、□は今後の発生量に影響する要因を示し、（＋）は助長または促進、（－）は抑制、（±）は傾向維持を意味します。

4 なし

病害虫名	発生 予想 (発生量)	予報の根拠	防除上注意すべき事項
黒星病	並	○4 月中旬の発生量：無 □前年秋季の発生量：無（－） □気象予報：気温は高い、降水量はほぼ平年並（±）	・「病害虫診断のポイントと防除対策」（ 参照 1 ）を参考に防除対策を実施する。 ・薬剤防除の際は、耐性菌の発現を防ぐため、作用機構が同じ薬剤の連用を避ける。
ハダニ類	並	○4 月中旬の発生量：－ □果菜類でのハダニ類の発生：やや少～並（－） □気象予報：気温は高い、降水量はほぼ平年並（±）	・ナミハダニ及びカンザワハダニは、5 月以降に施設イチゴ、ナスなどから移動して発生が増加することがあるため、注意する。 ・早期発見に努め、発生を確認したら速やかに薬剤による防除を実施する。
アブラムシ類	並	○4 月中旬の発生量：やや少 □気象予報：気温は高い、降水量はほぼ平年並（＋）	・早期発見に努め、発生を確認したら速やかに薬剤による防除を実施する。
果樹 カメムシ類	やや多	○4 月中旬の発生量：－ □予察灯等による誘殺数：平年並（±） □越冬調査による虫数：やや多（＋） □気象予報：気温は高い、降水量はほぼ平年並（±）	・「病害虫診断のポイントと防除対策」（ 参照 1 ）を参考に防除対策を実施する。 ・雑草及び防風垣の着果性樹木（イヌツゲ、ヒバ類など）、モモの果実及び開花時のカンキツ類などにも飛来し寄生するので、発生に注意する。 ・防除所発表の「フェロモントラップ等調査データ」（ 参照 2 ）を参考に、発生動向に注意して防除を実施する。
シンクイムシ類 (ナシヒメシンクイ) (第 1 世代幼虫)	発生時期 並 発生量 多	○4 月中旬の発生量：－ ■フェロモントラップによる越冬世代成虫の初誘殺確認時期：並（±） □前年秋季の発生量：多（＋） □フェロモントラップによる誘殺数：多（＋） □気象予報：気温は高い、降水量はほぼ平年並（＋）	・「病害虫診断のポイントと防除対策」（ 参照 1 ）を参考に防除対策を実施する。 ・交信攪乱剤（コンフューザー N 等）を第 1 世代成虫の発生期（5 月下旬～6 月上旬）から使用する。ナシ園の周囲を含め広範囲で使用する事が効果的である。 ・防除所発表の「フェロモントラップ等調査データ」（ 参照 2 ）を参考に、第 1 世代成虫の発生期に注意し、幼虫の発生初期に薬剤散布を行う。

参照 1：病害虫診断のポイントと防除対策 <https://www.pref.saitama.lg.jp/b0916/point-h27kai.html>

参照 2：フェロモントラップ等調査データ <https://www.pref.saitama.lg.jp/b0916/bojo/pheromonetrapp.html>

表の見方について

- ・予報の発生量は、予報月の平年値（埼玉県の過去 10 年間の平均）との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
- ・並*：予報月における発生が過去 10 年間で確認されていない病害虫について、「発生が見られない」と予想した場合、予報の発生量を「並*」と示しています。
- ・多**：調査月における発生が過去 10 年間で確認されていない病害虫について、今回の調査時に発生があった場合、「多**」と示しています。
- ・予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、予報月の平年値（埼玉県の過去 10 年間の平均）との比較で、「早、やや早、並、やや遅、遅」の 5 段階で示しています。
- ・予報の根拠の○は現在の発生状況、■は今後の発生時期、□は今後の発生量に影響する要因を示し、（＋）は助長または促進、（－）は抑制、（±）は傾向維持を意味します。

5 トマト（冬春栽培）

病害虫名	発生 予想 (発生量)	予報の根拠	防除上注意すべき事項
灰色かび病	並	○4 月中旬の発生量：散見 □気象予報：気温は高い、降水量はほぼ平年並（±）	・「病害虫診断のポイントと防除対策」(参照 1) を参考に防除対策を実施する。
葉かび病	並	○4 月中旬の発生量：無 □気象予報：気温は高い、降水量はほぼ平年並（+）	・多湿により発生が助長されるため、湿度管理に注意する。
コナジラミ類	並	○4 月中旬の発生量：やや少 □気象予報：気温は高い（+）	・本虫は黄化葉巻病を伝搬するため、防除対策を実施する。
【共通注意事項】 ・早期発見に努め、発生を確認したら速やかに薬剤による防除を実施する。 ・薬剤防除の際は、耐性菌・抵抗性害虫の発現を避けるため、作用機構が同じ薬剤の連用を避ける。			

参照 1：病害虫診断のポイントと防除対策 <https://www.pref.saitama.lg.jp/b0916/point-h27kai.html>

6 なす（夏秋栽培）の防除対策

病害虫名	防除上注意すべき事項
アザミウマ類	・4 月以降の気温上昇により、発生が早まる可能性があるため、定植時の防除を徹底する。
アブラムシ類	・早期発見に努め、発生を確認したら速やかに薬剤による防除を実施する。 ・抵抗性害虫の発生を防ぐため、作用機構が同じ剤の連用を避ける。

表の見方について

- ・予報の発生量は、予報月の平年値（埼玉県の過去 10 年間の平均）との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
- ・**並***：予報月における発生が過去 10 年間で確認されていない病害虫について、「発生が見られない」と予想した場合、予報の発生量を「並*」と示しています。
- ・**多****：調査月における発生が過去 10 年間で確認されていない病害虫について、今回の調査時に発生があった場合、「多**」と示しています。
- ・予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、予報月の平年値（埼玉県の過去 10 年間の平均）との比較で、「早、やや早、並、やや遅、遅」の 5 段階で示しています。
- ・予報の根拠の○は現在の発生状況、■は今後の発生時期、□は今後の発生量に影響する要因を示し、（+）は助長または促進、（-）は抑制、（±）は傾向維持を意味します。

7 きゅうり（冬春栽培）

病虫害名	発生 予想 (発生量)	予報の根拠	防除上注意すべき事項
べと病	並	○4 月中旬の発生量：並 □気象予報：気温は高い、降水量はほぼ平年並（±）	・「病虫害診断のポイントと防除対策」(参照 1) を参考に防除対策を実施する。
うどんこ病	並	○4 月中旬の発生量：やや少 □気象予報：気温は高い、降水量はほぼ平年並（±）	・やや乾燥した条件により助長されるため、ハウス内の温湿度管理に注意する。 ・樹勢低下は発生を助長するため、適切な肥培管理を行う。
褐斑病	やや少	○4 月中旬の発生量：無 □気象予報：気温は高い、降水量はほぼ平年並（+）	・「病虫害診断のポイントと防除対策」(参照 1) を参考に防除対策を実施する。
アザミウマ類	並	○4 月中旬の発生量：並 □気象予報：気温は高い（+）	・本虫は黄化えそ病を伝搬するため、「病虫害診断のポイントと防除対策」(参照 1) を参考に防除対策を実施する。
コナジラミ類	やや多	○4 月中旬の発生量：散見 □気象予報：気温は高い（+）	・本虫は退緑黄化病を伝搬するため、「病虫害診断のポイントと防除対策」(参照 1) を参考に防除対策を実施する。
【共通注意事項】 ・早期発見に努め、発生を確認したら速やかに薬剤による防除を実施する。 ・薬剤防除の際は、耐性菌・抵抗性害虫の発現を避けるため、作用機構が同じ薬剤の連用を避ける。			

参照 1：病虫害診断のポイントと防除対策 <https://www.pref.saitama.lg.jp/b0916/point-h27kai.html>

8 ねぎ（秋冬栽培）の防除対策

病虫害名	防除上注意すべき事項
ネギアザミウマ	・「病虫害診断のポイントと防除対策」(参照 1) を参考に防除対策を実施する。 ・定植時の防除を徹底する。 ・早期発見に努め、発生を確認したら速やかに薬剤による防除を実施する。 ・薬剤防除の際は、耐性菌・抵抗性害虫の発生を防ぐため、作用機構が同じ薬剤の連用を避ける。

参照 1：病虫害診断のポイントと防除対策 <https://www.pref.saitama.lg.jp/b0916/point-h27kai.html>

表の見方について

- ・予報の発生量は、予報月の平年値（埼玉県の過去 10 年間の平均）との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
- ・**並***：予報月における発生が過去 10 年間で確認されていない病虫害について、「発生が見られない」と予想した場合、予報の発生量を「並*」と示しています。
- ・**多****：調査月における発生が過去 10 年間で確認されていない病虫害について、今回の調査時に発生があった場合、「多**」と示しています。
- ・予報の発生時期は、時期の予想ができる病虫害に限り、予報月の平年値（埼玉県の過去 10 年間の平均）との比較で、「早、やや早、並、やや遅、遅」の 5 段階で示しています。
- ・予報の根拠の○は現在の発生状況、■は今後の発生時期、□は今後の発生量に影響する要因を示し、（+）は助長または促進、（-）は抑制、（±）は傾向維持を意味します。

9 茶

病害虫名	発生 予想	予報の根拠	防除上注意すべき事項
チャハマキ (第 1 世代幼虫)	発生時期 やや早 発生量 やや多	○4 月中旬の発生量：並 ■県予察ほ場の越冬世代成虫 初飛来日は 4 月 11 日（平成 4 月 16 日）：やや早（+） □フェロモントラップによる 越冬世代成虫の誘殺数：やや 多（+） □気象予報：気温は高い、降水 量はほぼ平成並（+）	・「病害虫診断のポイントと防除対策」（ 参照 1 ）を参考に防除対策を実施する。 ・防除所発表の「フェロモントラップ等調査データ」（ 参照 2 ）を参考に、一番茶終了後速やかに防除対策を実施する。
チャノ コカクモン ハマキ (第 1 世代幼虫)	発生時期 早 発生量 やや多	○4 月中旬の発生量：並 ■県予察ほ場の越冬世代成虫 初飛来日は 4 月 21 日（平成 4 月 27 日）：早（+） □フェロモントラップによる 越冬世代成虫の誘殺数：やや 多（+） □気象予報：気温は高い、降水 量はほぼ平成並（+）	・防除所発表の「フェロモントラップ等調査データ」（ 参照 2 ）を参考に、一番茶終了後速やかに防除対策を実施する。
チャノホソガ (第 1 世代幼虫)	発生時期 並 発生量 やや少	○4 月中旬の発生量：無 ■県予察ほ場の越冬世代成虫 初飛来日は 4 月 10 日（平成 4 月 9 日）：並（±） □前年秋季の発生量：少（-） □気象予報：気温は高い、降水 量はほぼ平成並（+）	・防除所発表の「フェロモントラップ等調査データ」（ 参照 2 ）を参考に、一番茶終了後速やかに防除対策を実施する。
カンザワ ハダニ	発生量 並	○4 月中旬の発生量：やや少 （-） ■県予察ほ場での発生量：やや 多（+） □気象予報：気温は高い、降水 量はほぼ平成並（+）	・「病害虫診断のポイントと防除対策」（ 参照 1 ）を参考に防除対策を実施する。 ・一番茶摘採前の新芽に発生が多く認められる場合は、摘採前日数に十分注意しながら、防除対策を実施する。
クワシロ カイガラムシ (第 1 世代幼虫)	発生時期 並	■有効積算温度（アメダスデータ青梅）による第 1 世代幼虫 ふ化最盛期予測は 5 月 13 日 （平成 5 月 15 日）：並（±）	・「病害虫診断のポイントと防除対策」（ 参照 1 ）を参考に防除対策を実施する。 ・防除適期は、ふ化幼虫期を中心とした短期間なので、関係機関から出される最新の防除時期予測に留意する。

参照 1：病害虫診断のポイントと防除対策 <https://www.pref.saitama.lg.jp/b0916/point-h27kai.html>

表の見方について

- ・予報の発生量は、予報月の平年値（埼玉県の過去 10 年間の平均）との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
- ・並※：予報月における発生が過去 10 年間で確認されていない病害虫について、「発生が見られない」と予想した場合、予報の発生量を「並※」と示しています。
- ・多※※：調査月における発生が過去 10 年間で確認されていない病害虫について、今回の調査時に発生があった場合、「多※※」と示しています。
- ・予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、予報月の平年値（埼玉県の過去 10 年間の平均）との比較で、「早、やや早、並、やや遅、遅」の 5 段階で示しています。
- ・予報の根拠の○は現在の発生状況、■は今後の発生時期、□は今後の発生量に影響する要因を示し、（+）は助長または促進、（-）は抑制、（±）は傾向維持を意味します。

＜農薬使用上の注意事項＞

- 1 農薬は、ラベルの記載内容を必ず守って使用する。
- 2 剤の使用回数、成分毎の総使用回数、使用量及び希釈倍数は使用の都度、確認する。
特に、蚕や魚に対して影響の強い農薬など、使用上注意を要する薬剤を用いる場合は、
周辺への危被害防止対策に万全を期すること。
- 3 農薬を散布するときは、農薬が周辺に飛散しないよう注意する。
- 4 スピードスプレーヤを使用した防除ではドリフトが発生しやすいので、風の無い日に適正
な方法で散布する。
- 5 周辺の住民に配慮し、農薬使用の前に周知徹底する。
- 6 農薬の最新情報は、農薬登録情報提供システム（農林水産省）から検索できます。
農薬登録情報提供システム（農林水産省） <https://pesticide.maff.go.jp/>

— 埼玉県農薬危害防止運動実施中！ —

（令和 8 年 5 月 1 日～ 8 月 3 1 日）

表の見方について

- ・ 予報の発生量は、予報月の平年値（埼玉県の過去 10 年間の平均）との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
- ・ **並***： 予報月における発生が過去 10 年間で確認されていない病虫害について、「発生が見られない」と予想した場合、予報の発生量を「並*」と示しています。
- ・ **多****： 調査月における発生が過去 10 年間で確認されていない病虫害について、今回の調査時に発生があった場合、「多**」と示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病虫害に限り、予報月の平年値（埼玉県の過去 10 年間の平均）との比較で、「早、やや早、並、やや遅、遅」の 5 段階で示しています。
- ・ 予報の根拠の○は現在の発生状況、■は今後の発生時期、□は今後の発生量に影響する要因を示し、（+）は助長または促進、（-）は抑制、（±）は傾向維持を意味します。

(参考) 気象概要 1 か月予報 (令和8年4月23日発表)

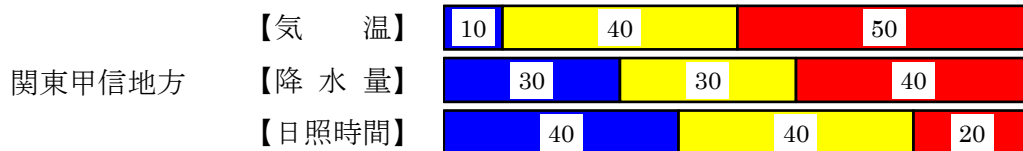
出典: 気象庁ホームページ

(https://www.jma.go.jp/bosai/season/#area_type=offices&area_code=110000.html)

<予報のポイント>

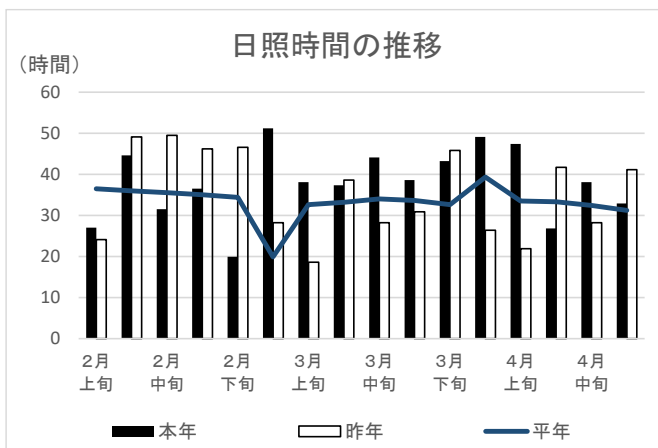
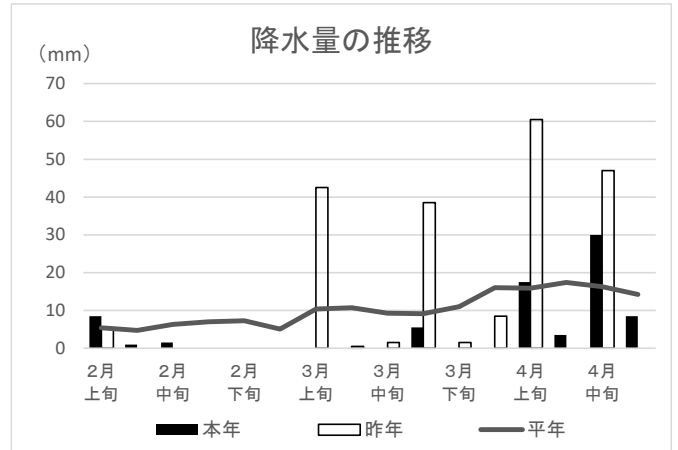
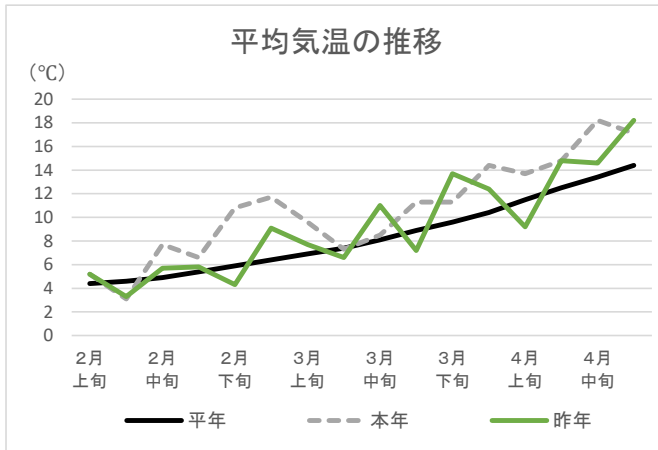
- ・暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。
- ・期間の前半を中心に前線や湿った空気の影響を受けやすいため、向こう1か月の日照時間は平年並か少ないでしょう。

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>



凡例: 低い (少ない) 平年並 高い (多い)

(参考資料) 過去の平均気温、降水量、日照時間 (熊谷)



問い合わせ先

埼玉県病虫害防除所

〒360-0102 埼玉県熊谷市須賀広 784

電話: 048-539-0661 FAX: 048-539-0663

E-mail: k3603114@pref.saitama.lg.jp

<http://www.pref.saitama.lg.jp/soshiki/b0916/>